

## はじめに

村上, 貴弘  
九州大学持続可能な社会のための決断科学センター : 准教授

<https://doi.org/10.15017/1792167>

---

出版情報 : 決断科学. 2, pp.6-11, 2016-12-31. 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター  
バージョン :  
権利関係 :

# はじめに

村上 貴弘

保全生態学・社会生物学

九州大学持続可能な社会のための決断科学センターは2013年の発足以来、世界19カ国、アフリカ、ヨーロッパ、東南アジア、東アジアと世界を股にかけて学生と教職員がまさに同じ釜の飯を食べながら、それぞれの社会課題について真剣に取り組み、統一的な調査・研究を続けている。それぞれの社会課題は、環境、災害、ガバナンス、健康、そして人間科学の5つのモジュールが分担し、たとえば環境モジュールではカンボジアの森林保全調査、災害モジュールはインドネシアでの小水力発電の持続可能な維持管理プロジェクト、ガバナンスモジュールは韓国での地域づくり、健康モジュールではバ

ングラデシュでグラミンググループと協働で遠隔医療システム導入プロジェクト、人間モジュールはフィンランドでの幸福研究などを行っている。そして、今回の特集を担当している総括モジュールは5つのモジュール活動を統合し、新たな学問体系である「決断科学」を立ち上げるという大きなミッションを掲げている。このような総合的な教育プログラムを経験することにより、学生はより深い専門性と広い俯瞰力、そして柔軟に実行することができる人間力を身につけることができるものと期待している。

多様な価値観を受容できるグローバルリーダーは、で

きるだけ多くの国を、自らの設定した課題をクリアすべく訪ね歩く経験が重要であろう。本プログラムが開始してから2年が経過した2015年時点で、残念ながら中南米地域だけが未達地域として残されていた。この西洋でも東洋でもない地域の歴史・文化・社会を実地で学ぶことは、世界をより深く理解するために必須のことと考えている。

センター長である矢原徹一先生は、30年以上にわたリメキシコにおいて植物調査を行い、33州のうち30州を踏破するほどメキシコには精通している。そこで、矢原センター長と総括モジュール教員が中心となり、新たなフィールドとしてメキシコを取り上げ、多様なテーマで実習を行ってみようと企画された。他のモジュールの実習のように、教員が持っている現場の社会課題について学生が一丸となり解決策を模索するというものではなく、学生一人一人がそれぞれメキシコをテーマにして事前に課題設定を行い、下調べをした後に実地で実習を行い、今回の文章をまとめていく。

このため、読んでいただければすぐに分かることだが、

内容は多岐にわたり、規範、歴史、食文化、環境、生物多様性、歯学、土木、果てはルチャ・リブレまで取り扱うことになった。これこそ、本プログラムの一つの狙いであった専門性に立脚した俯瞰力の鍛錬であり、かつそれらを「メキシコ」という横ぐしで繋ぐ統一的、超学際的研究・教育活動だろうと考えている。

本特集は3つのパートから構成されている。「メキシコとアジアの交流史」、「メキシコとアジアの食と生き物」、そして「現代メキシコの文化と社会」である。

「メキシコとアジアの交流史」では、西洋でも東洋でもないメキシコという国が、日本とはどのような時間軸で交わり、その関係性が深まってきたのか。多くの日本人にとっては忘れられた歴史となっている。本項では、その歴史をひもといてみたい。

まずは矢原センター長が、総論としてのメキシコと日本の150年の交流史を解説する。哲学専攻の中谷内氏は、さらに歴史をさかのぼって約400年前に長崎で処刑された26聖人殉教事件を振り返る。明治に入り、過剰人口と貧困対策のため榎本植民団が設立されたがその

詳細を歯学府の古川氏が解説し、続いて中国人のメキシコ移民史を医学府の胡氏に解説してもらおう。思想史を専攻する竹内氏は、メキシコでの共産党結党に尽力した日本人片山潜のメキシコでの日々を描いた。そしてこの項の最後を植物学者で教育者でもあった松田英二氏の個人史で締める。

「メキシコとアジアの食と生き物」。メキシコは亜熱帯から暖温帯まで多様な環境を有し、OECD諸国の中でもっとも生物の多様性が高い国であり、トウモロコシやインゲン、カボチャ、サツマイモなど多くの農作物の起源となっている地でもある。今、生物多様性保全や食の問題は世界規模の社会課題となっている。

そこではメキシコの食をテーマに、地質学を専攻する姜氏がトウガラシの韓国への伝播と拡大の歴史を、育種学や食育が専門の比良松氏からメキシコ食文化を概観する。さらに、ゲテモノとして扱われがちな昆虫食の次代への可能性として、アリ食を村上が紹介する。生物関連では、数千kmを移動する「旅するチョウ」の日墨比較を村上行う。

最後に、壮大な数の展示を誇り人類史を俯瞰で眺めることができるメキシコ人類学博物館での頭蓋骨展示にインスパイアされた古川氏による食育に関する論考を載せる。

「現代メキシコの文化と社会」。ここでは現代メキシコの水問題を工学専攻の中西氏に、「自由への闘争」という意味のメキシコプロレス「ルチャ・リブレ」について、同じく工学専攻の仲野氏に短く解説してもらおう。

メキシコシティーの水問題は、中南米諸国の積年の大問題であり、現在でもメキシコ国立自治大学（UNAM）で専門の研究チームが総合的な研究を行っている。中西氏のテーマが元となり、今後もUNAMの研究チームと連携を取る予定にしている。仲野氏のルチャ・リブレに関しては、メキシコ独特のプロレスがどのような背景で誕生し、その特徴的なマスクにどのような意味があるのか、興味深い論考となっている。

最後に、心理学を専攻する宮島氏から、メキシコから見た日本と世界の間を論じてもらおう。「交流」をキーワードに生物多様性、科学技術、社会変革にまで鋭く切

れ込む。さらに一歩進めた「交換」という行動を軸に、今後の国家間の交流が利己的な動機に基づくのではなく、協力的行動に基礎をおくことで持続可能な社会発展が可能となることを論じている。

人間社会の持続可能な発展には、旅をはじめとした異文化との交流、そして知識・情報の交換が必須である。この本の中に描かれている多様なメキシコの世界を読むことで、読者の皆様に驚きを提供することができ、それによって少しでも海外に目が向くことがあれば、これにまさる喜びはない。ぜひ楽しんで読んでもらいたい。

最後に、メキシコで大変お世話になっているメキシコ国立自治大学のKen OHYAMA先生と有村理恵先生にこの場をお借りして深く感謝したい。今後とも、有機的な連携が両国で持続することを切に願っている。



村上貴弘 むらかみ たかひろ

九州大学持続可能な社会のための決断科学センター 准教授 総括モジュール

1971年神奈川県生まれ。茨城大学・北海道大学修了後、京都大学（学振特別研究員）・テキサス大学・カンザス大学（ともに学振海外特別研究員）・理研 CDB・北海道大学（ともに学術研究員）でアリ・イモリ・ブラナリアなどの研究を行い、2014年4月より現職。  
アリの音声コミュニケーション、侵略的外来アリの防除、原発周辺のアリ相調査などを行っている。

